

内野雅文 写真展

とどまらぬ長き旅の…

2013年11月19日(火)―12月15日(日) 午前9時〜午後9時 月曜日・11月26日休館

会場 / 砂丘館 ギャラリー(蔵)ほか 入場無料

主催 / 砂丘館 共催 / 新潟大学人文学部 協力 / 清里フォトアートミュージアム
企画ディレクター / 石井仁志(20世紀メディア評論メディアアプロデューサー)

砂丘館

旧日本銀行新潟支店長役宅

ギャラリートーク1

2013年12月1日(日)午後2時〜4時

「内野雅文 人と作品」

- 友長勇介(写真家)
- 石井仁志
- 聞き手: 大倉 宏
- 参加費500円(予約不要、直接会場へ)

ギャラリートーク2

2013年12月7日(土)午後2時〜4時

「ストリートスナップショットをめぐって」

- 石井仁志
- 松沢寿重(新潟市美術館学芸員)
- 聞き手: 甲斐義明(新潟大学人文学部准教授)
- 参加無料(予約不要、直接会場へ)



砂丘館

旧日本銀行新潟支店長役宅

指定管理者
新潟絵屋・新潟ビルサービス特定共同企業体

私たちは砂丘館の自主事業を応援しています。

新潟日産自動車株式会社

雪国あられ株式会社

NSGグループ

株式会社ナレッジライブ

新潟ビルサービス

丸屋本店

郷土の文化に親しむ会



内野 雅文〈ケータイ〉2002年 発色現像方式プリント
32.8×49.1cm © Shigeo UCHINO
清里フォトアートミュージアム蔵

内野雅文

UCHINO Masafumi

1973年東京都生まれ。96年東京造形大学造形学部デザイン学科デザイン専攻1類写真コース卒業。2008年元旦、撮影中に急性心不全にて急逝(享年34歳)。主な写真展に、96年「東京ファイル」、99年「うりずん―沖縄先島」(以上、新宿コニカプラザ/東京)、2001年「写真・内野雅文2001」(12回連続毎月写真展、ギャラリーニエプス/東京)、02年「野ざらし紀行」(銀座ニコンサロン)、03年グループ展『写真2003』「ケータイ」(つくば美術館/茨城)、「野ざらし紀行」(ギャラリーナダル/大阪)、「空と海への巡礼」(再春館ギャラリー/東京)、04年「ケータイ 1996-2004」(新宿ニコンサロン)、05年「カガミ ノ ナカ」(コンテンポラリーフォトギャラリー/東京)、「IDOLS」(ギャラリーニエプス/東京)、グループ展『mio写真奨励賞2005入賞作品展』「A Train Window in spring」(天王寺ミオ mioホール/大阪)、06年『内野雅文 photo works 1996-2006』「車窓から」 「うりずん―沖縄先島」 「空と海への巡礼」 「野ざらし紀行」 「ケータイと鏡」(以上、gallery176/大阪)、グループ展『写真の蓋然性』 「ケータイ」 「カガミ」 「アイドル」(東京造形大大学院渋谷サテライト/東京)、07年『内野雅文 photo works 1996-2006』 「アイドル」(gallery176/大阪)、グループ展『ミオ写真奨励賞フォトライブラリー』(天王寺ミオ11階ライトガーデン/大阪)がある。04年、写真集『ケータイと鏡 1996-2004』を出版。06年写真展「内野雅文 photo works 1996-2006」の図録『masafumi UCHINO : photo works 1996-2006』を出版。また、1997、99、2000〜05、07年度の『ヤングポートフォリオ』(主催:清里フォトアートミュージアム)において、作品がコレクションされている。



内野 雅文 (KYOTO) 2007年 © Shigeo UCHINO

見えない顔

大倉 宏

はじめて見せられた内野雅文の写真で、印象的だったのは、献燈と書かれた提灯に、立つ人の顔が隠れたスナップだった。そこから見て行くと、顔のない人の写真がところどころ目についた。顔は傘の中だったり、幕の向こうだったりするのだが、顔のないその体が、忘れがたかった。

生前の内野の写真が注目されるきっかけとなった「ケータイと鏡」シリーズでも、自分を映す鏡の背板に、女たちの顔が隠されている。他方ケータイをのぞく人々の顔は、見えてはいるけれど、同時に見えていない。顔が見えるとは、その顔を見る私が、向こうの目にも見えていることだとすれば、ケータイを持つ人の目に、私を含む周囲は消えているからだ。

写真とコンピューターを組み込んだ電話(ケータイ)の登場は、個人の世界が安易に増殖し、広がり、文字通り「全世界」のように見え出す時代の始まりだった。そんな果てしない個の世界に住み始めた、ばらばらな人の集合である都市の光景が、このシリーズには映し出される。ルイ・ウィトンやミッキーマウスを纏う人々を撮ったシリーズ「アイドル」とともに、それらには同時代への内野雅文の批評的視線が読みとれる。しかしそれは、彼の写真のもうひとつの半身であった「旅」のシリーズ、あるいは純粋なストリートスナップである東京や京都を撮った写真と、どのような関係にあったのだろうか。

「ケータイ」シリーズは、個の世界に自閉する人々を、その「外」から、「外」とともに、収めている。携帯の画像に、会話に、メールの文字に吸い込まれる顔の側からの「外」に、内野雅文は確かに注意を注いでいたように思える。批評的に見つめた人々のありようが、同時に、自分だけのカットを狩るべく都市を渉猟する、写真家のそれと重なる部分があることに、気付いてしまったのだ。

写真家が自分だけの個性的／個人的なカットを追求し、そこに自閉しようとするほど、見えなくなっていく影の闇の部分。そこに内野雅文の写真の、重要と言っている呼吸孔があったと感じさせるのが「車窓から」というもうひとつのシリーズだろう。車窓の枠内に映し出される桜や雲海のような雪や海や夏の野の鮮やかさは、ケータイやパソコンの画面の魔と重なる。その魔は子供の頃から「何時間電車に乗っても飽きなかった」という内野を絡みとり、封じ込め、彼を写真に向かわせたであろう最初の網(ネット)だったのかも知れない。このシリーズが、けれどきわめて印象的なのが、車窓の中ではなく、その外——闇として現れ、捉えられた車窓の枠外としての「車内」であり、車窓を横切り、遮る人々の影であることに注意しなくてはならない。

車窓は、車窓に見入る私を、同乗した人々とともに運んで行く暗箱としての車内があって、輝く。フィルムを装填する箱としての形状をもはや持たないケータイのカメラは、車体の消えた車窓かも知れない。それゆえそれは「全世界」の相貌を帯び、人を個人的情報、関係の網に解き放つごとく見せかけつつ、封じ込め、そのことで奇妙な画一性の人々を無意識裡に従属させもする。非日常的なものであった写真が、すべての人のものに、日常のありふれた道具に、なっていくこととしていた時代に、すべての顔にかぶされていたネットを、写真は、どのようにはがし、その向こうに、なお届き続けることができるのか。

明るい自然の光を、生き生きとした人々を映し出す内野の旅写真が、ただ明るく、生き生きとした写真には見えない不思議に打たれるのだが、それはそこに答えのない、息苦しい、その自問が、ぴったり、影となっってはいつているせいであるかも知れない。